

ポスターセッション発表要旨

日本中世英語英文学会第 30 回大会
2014 年 12 月 6 日（土）10:00–13:00
同志社大学今出川キャンパス
良心館 RY106 号室

1. Indefinite pronoun *man* in the Three Old English Gospels

堀 美里（慶應義塾大学大学院）

Oxford English Dictionary によると、英語は 15 世紀のある時点まで不定代名詞 *man* を保持していたが、中英語のある時期において廃語となる。古英語・中英語における不定代名詞 *man* の研究は、Campbell(1959), Mustanoja (1960), Mitchell(1985)など、それについて論じている文法書は多くあり、言語学的な研究も近年増えてきているものの、フィロロジカルな視点から *man* の使用を包括的に、網羅的に論じた研究はない。Campbell (1959)によれば、*man* は受動態の periphrasis(迂言的表現)であり、同じ、あるいは似た内容を表現する場合のもうひとつの選択肢であったことがうかがえる。しかし英語史的な観点より、不定代名詞 *man* がどのように使われたか、時代が下るにつれどのように使用が変化したか、そしてなぜ英語から消失したのか、そのような疑問に答えるには未だ研究は不十分であり、古英語から初期中英語までのテキストにおいて詳細に跡付ける必要がある。不定代名詞 *one* の登場により *man* がその役割を明け渡して最後には消失したことは明らかであるが、本研究では不定代名詞 *man* を博士論文のテーマとして据え、*one* に取って代わられるまでの *man* の使用を明らかにすると同時に、初期古英語から初期中英語までを対象とし、*man* の使用の諸相を明らかにするものである。本ポスター発表では、本研究の一部分である Old English Gospels, つまり *West-Saxon Gospels*, *Lindisfarne Gospels*, *Rushworth Gospels* を取り上げ、ラテン語と古英語間の翻訳における対応における *man* の使用を分析・考察する。

2. 強意副詞の脱語彙化と再語彙化：強意から迅速への展開

小笠原清香（立教大学大学院）

従来、強意副詞の意味変化については、具体的語彙から強意語への文法化・脱語彙化のプロセスが観察されてきた (Sinclair 1992; Partington 1993; Lorenz 2002)。Méndez-Naya (2003) は Helsinki Corpus を使用し、*swithe* の文法化について詳細に論じているが、この語が強意用法の後に発達させる「迅速」の意味については特別に着目していない。本発表の目的は、OE から EME にかけて強意語として広く普及した *swithe* と、ME における強意語の一つであった *fast* の類似した意味変化のプロセスを通時コーパスと文学作品を用いて実証的に検証することである。特に、これらの語彙が脱語彙化した後、再び語彙化すること論証するために、動詞と強意語の共起について考察する。

3. 古英語の色彩と中英語の色彩

吉村耕治 (関西外国語大学短期大学部)

色彩は人間生活と深い結びつきを持っており、それぞれの国や地域の風土や文化が色名にも反映している。色彩は機能的、象徴的に用いられるだけでなく、人間の願いや祈りが色彩に込められていることもある。*blue* の初出例は 1300 年ごろと考えられ、*blue* には「明るい青」と「暗い青」があり、古英語期には「暗い青」を表す *bláhháwen* (of a blue hue, bluish, violet or purple color) や *bláwen* (dark blue), *gláesen* (shiny pale grey/blue), *háwe* (iron-colored, bluish), *háwen* (blue, purple, azure, green), *háwengrēne* (blue-green, grey-green), *sweartháwen* (dark blue), *wáden* (blue) などが見られるだけであった。古英語期には亜麻色 (淡黄褐色) を表す *línháwen* (flax-colored) のように「普通名詞+色」の表現や、修飾語が付いた *healfhwīt* ('half white', somewhat white), *mērehwīt* (pure white), そして、*scīrbasu* (bright purple) のような系統色名の原型の表現や、*æppel-fealu* (apple-yellow), *æcgræg* (ashy grey), *blōdrēad* (blood-red), *colswear* (coal-black), *flōdblāc* (pale as water, pale through fear of drowning) のような複合語の表現、*brūn-basu* (brownish-purple) のような中間色の表現も用いられている。中英語期には OF や ON からの借用語の色名が多く、*gawdy green* (a yellowish green color or pigment, a fabric or material of this color) や *enker-grene* (very green, vivid green) などが見られる。Chaucer の 1375 年ごろの詩には、顔色の悪さを表す “betwixe pale and grene” という表現も存在する。

4. Margaret Paston の書簡 どこまでがオリジナル？

小原 平 (東京慈恵会医科大学)

Norman Davis (1971, p. xxxvji) は、Margaret Paston の書簡が 29 もの違った筆跡で書かれていて、そこから以下のように述べている。

The natural interpretation of this multiplicity of hands in one person's work surely is that the women could not write, or wrote only with difficulty, and so called on whatever literate person happened to be most readily at hand—in Margaret's letters particular hands tend to be concentrated in limited periods.

彼女が書けなかったという説はほぼ定着していて、Helen Castor (2006, p. 51) も、Margaret がご亭主の John I に書簡を書く際には、自分のまわりにいる召使にすっかり頼り切っていたと述べている。しかしそのことが、彼女が自分の気持ちを素直に表現する妨げにはならなかったと付け加え、さらに以下のように述べている。

Her hand may not have held the pen, but it was unquestionably her voice that spoke in the words on the page.

John I の場合、書簡は口頭筆記され、それに彼が書き加えたり、訂正をしたりしたと一般に考えられているが、Margaret の場合はどうだろうか？ John II や John III は、Margaret のために書いた書簡のなかでは、関係代名詞は“that”を多用するのであるが、自身の書簡においては“which”を使っているケースが多い。これはもちろんそれぞれの書簡の書かれた時期が必ずしも一致していないということも理由のひとつであろうが、Margaret の書簡には、Castor が言うように Margaret 自身の言葉が書かれていることを裏付ける証拠のひとつとなりうるようにも思われる。

ところが、必ず反証がでてくるもので、Richard Calle の場合、彼自身の書簡においても、Margaret のために書いた書簡においても、同じように“which”を使うことが多いのである。Margaret の家政を取り仕切る能力は、よく知られているところであり、使用人たちの掌握術も、当然長けていたと考えられる。手紙一通書く場合でも、書かせる相手によって方法を変えていたのだろうかと思像するのは、なかなか興味深い。本論では、Alexander Bergs (2005, p.132-209) の方法を利用して、Margaret Paston とその各書き手たちの書簡中の関係代名詞の使用状況をデータ化して、そこに類似性がみられるかどうかを検討してみたい。

6. キャクストン版『黄金伝説』における「旧約聖書」の本文編集

－「アダム」「ノア」「アブラハム」を例として－

田口まゆみ（大阪産業大学）・徳永聡子（慶應義塾大学）

ヤコブス・ド・ボラギネ (Jacobus de Voragine, c. 1230-98) が編纂した『黄金伝説』 (*Legenda aurea*) は、中世後期ヨーロッパにおいて最も人気を博した作品のひとつである。各国の俗語にも翻訳され、原作のラテン語版とともに数多くの写本と初期印刷本が現存する。英訳の初版 (*editio princeps*) は、印刷の始祖ウィリアム・キャクストン (d. 1492) により、1483～84年に出版された (*The Golden Legend*; STC 24873, 24874)。キャクストンはフランス語訳 (*Légende dorée*) を底本として翻訳しつつ、さまざまな変更を独自に加えていたことが知られている。なかでも「旧約聖書」の物語の一部を取り入れたことは有名である。1409年のアランデル大司教令発布以降、聖書の俗語への翻訳や転写が禁じられていた時代に、なぜキャクストンが『黄金伝説』にこのような追加を加えたのか、また彼がどのような作品を典拠としたのか、Norman Blake, Sarah Horrall, Richard Hamerといった研究者たちが見解を示してきた。こうした従来の研究をもとに、発表者たちは『聖書物語』(ラテン語版: *Historia scholastica*; フランス語訳: *Bible historiale*) や『世を馳せめぐる者』(*Cursor mundi*) 等との比較から、キャクストン版『黄金伝説』に追加された「旧約聖書」の本文分析を進めている。本ポスター発表では、冒頭の3つの章(「アダム伝」「ノア伝」「アブラハム伝」)の本文編集に関する研究成果を報告する。

6. John Lydgate *The Temple of Glas*—first version に関する一考察—

足立峻一（駒澤大学大学院）

中世後期の作品の一つに *The Temple of Glas* という恋愛寓意詩の夢物語がある。悩みを抱えた男性が、ある日の夢の中でガラスの神殿を見つけ、その神殿内で悩める者たちの嘆きや様々なことを見聞きするという物語である。この作品を創作した John Lydgate は十五世紀前半に活躍した人物であり、イングランド南東部、East Anglia, Suffolk 州の Bury St Edmunds にあるベネディクト会に所属する修道士であった。さらに、ヘンリー五世やグロスター公ハンフリーに支持され、Chaucerian の一人として活躍し、数多くの作品を世に残した。

The Temple of Glas という作品の完全な状態で現存する写本は七つあるが、Norton-Smith (1958) は、この作品を改編や削除の状況に応じて first, intermediate, final の三つの version に分類している。しかしそのように三種類の分類がされているが、同じ version の中でも果たして本当に異なるところはないのだろうか。Shick (1891) が各写本の異同を挙げているが、詳細には論じていない。そのため異同を再検討するとともに、異なる点がある場合、物語にどのような影響をもたらすのかについても論じていきたい。

本発表では first version とされている Cambridge, University Library, MS Gg. 4. 27, fols. 491r-509v. (G 写本) と John Shirley が写字したことで有名な London, British Library, MS Additional 16165, fols. 206v-231r. (S 写本) の二つの写本に焦点を当てる。それぞれの写本の作製された時期は Mitchel (2007) によると、G 写本は 1420 年から 1425 年の間、そして S 写本は 1450 年だと考えられている。両テキストにはどのような相違点があるのかを把握するとともに異同をまとめた表を作成し、明らかにしたい。

7. 騎士道概念の起源と発展

長谷川千春（鶴見大学非常勤講師）

本報告では、騎士道概念がどのように変化し、発展したかという過程を紐解いていく。騎士道(chivalry)は、元々、フランス語の‘chevalier’[馬上の戦士]という単語から発展し、騎士の持つべき理想道德などの意味が付け加えられていったものである。しかしながら、chivalry という言葉がなかった時はどのような語で、戦士の理想像や行動規範を表していたのであろうか。たとえば、ベオウルフが体現する英雄像は、戦闘者としての力量・名誉と恥・忠誠心・寛大さという観点から chivalry に類似している。言語・時代・文化的な断絶があるとしても、英雄像の慣習的な描き方にはある程度の連続性があるということから、本質的な騎士道の本義は古来から継続して受け継がれている、という図式を概観する。

8. 中英語ロマンスにおける異教徒表象の考察

趙 泰昊（慶應義塾大学大学院）

今回の発表では、中英語で書かれたロマンス群を中心に扱いながら、その中で『サラセン』という総称をもって描き出される異教徒の姿を考察し、大陸の同種の作品とは異なる英語作品独特の表象を明らかにすることを目的とする。

キリスト教徒と異教徒の対立や交流を扱った文学作品は中世を通して数多く作られたが、その中でも同時代の十字軍的な戦闘行為を主題とする騎士ロマンスや Charlemagne の遠征を題材とした文学作品において、『サラセン』という呼称は宗教戦争における敵であるイスラム教徒を指す言葉として用いられている。C. Meredith Jones などの先行研究の中に明らかのように、フランスをはじめとする大陸のこうした文学作品の中では、これらの『サラセン』にはキリスト教的な規範から逸脱した他者としての描写が与えられていた。

中英語のロマンス群における『サラセン』の描写においてもこうした従来の慣習の影響は見られる一方で、その異教徒に対する態度に英語ロマンス独特の特徴が見られる。発表においては主に Charlemagne の伝説を題材とした作品群と *penitential romance* と呼ばれるロマンス群を個別に分析する。それらの作品に見られる特徴が、大陸のロマンスにはない『サラセン』に対する寛容性として理解することができるという可能性を指摘する。

9. 世界の周縁から中心へ―後期中英語ロマンスにおけるローマ―

杉山ゆき（慶應義塾大学大学院）

本発表は、後期中世イングランドにおけるローマ像をローマ巡礼記や頭韻『アーサー王の死』、チョーサーの『弁護士の話』の記述等から読み取することを目的とする。当時ローマは、教皇庁を有し巡礼を集めるキリスト教圏の第一の都であった一方、トロイの威容を受け継ぐ帝国の廃墟でもあった。また、マッパムンディにおいては、ブリテン島は周縁に存在し「世界の他者」(the worldly Other) とみなされたが、ローマは中心部に描かれた。イングランドにとってローマはキリスト教圏の首府かつ世界の中心として従うべき対象である一方、傲岸で不道德な異教時代、キリスト教的慰めを欠いた没落の物語をも示したのである。

この帝国の傲慢と没落の宿命を前景化して生まれたのが頭韻『アーサー王の死』だ。この詩人は十字軍騎士やプリアモス卿を登場させ、アーサー王の年代記の伝統をイングランドの共同体的理想を脅かす傲慢の罪に対する警鐘の教訓物語へと翻案したのである。

一方、キリスト教圏の首府ローマとブリテンの関係の転覆の可能性を背景のみにとどめているのが『弁護士の話』におけるクスタンスの旅である。チョーサーは、ローマ皇女かつ聖なる教会の娘であるクスタンスのブリテン島とローマの往復に焦点をあて、彼女の息子モーリスのローマ皇帝即位については語ろうとしない。

これらの分析をもとに、後期中英語ロマンスにおいてローマがどのように描かれたのか、またその表象がイングランドのアイデンティティ形成にいかに関与したのかを考えていきたい。

10. Floris and Blancheflour 物語各版における主人公の改宗

小川真理（明治大学兼任講師）

Floris and Blancheflour は中世に各国語版が流布したロマンスだが、非キリスト教徒である主人公 Floris が物語の大団円において Blancheflour と結婚し父親のスペイン王位を継承する際のキリスト教改宗の描写には各版によって大きな相違がみられる。例えば古仏語版では Floire 自身が改宗するだけでなく諸侯や人民も改宗させ、従わない者は厳罰に処す。一方で中英語版では Auchinleck 写本版で Floris がキリスト教徒になったという記述があるのみで、他の写本ではその言及さえ存在しない。そもそもこの物語は各版とも異宗教間の境界や対立が非常に曖昧である上、主人公の自発的な振る舞いや流血を伴う行動がほとんどみられない作品であるという特徴を有している。その中で翻案によっては暴力的でさえあるこの結末の描写と各国語版間の相違は強い印象を残す。古仏語、中英語版だけではなく当時の他言語版も比較対照することによって、各版の枠組み、現存写本の文脈、歴史などから Floris and Blancheflour 物語における改宗について考えてみたい。

11. 古英語後期から中英語初期に於ける古北欧語から古英語への借入語

—動詞に於ける考察—

川村朋子（信州大学大学院）

私は古英語期のヴァイキング時代における古英語と古北欧語の借用語動詞について現在研究を進めている。古北欧語からの借入語の中でも動詞が借入されており、さらに動詞の中でも強変化動詞、弱変化動詞が借入されていることは大変興味深い。研究を進める中で、古北欧語の強変化動詞が古英語に借入される際、古英語の文法体系に適した形で古北欧語と同じ強変化動詞として借入されていることが分かった。そこから、両言語話者間である程度のコミュニケーションが図れていたことが推測できる。また、古英語、古北欧語で互いに強変化動詞であることから、強変化動詞と認識した上で借入したように推測できる。

「他言語からの借入語からは決まって弱変化活用する (Baugh and Cable 2002, p. 162)」この記述から、借入語が強変化動詞として借入されることは比較的珍しいことが分かる。古英語にとって外国語であった古北欧語の強変化動詞が借入されたということはということが考えられるのか考察を深め、修士論文の構想について発表したい。